

学会だより No. 109 2019年6月1日

発行：上智大学哲学会

〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町 7-1 上智大学哲学研究室内

TEL：03-3238-3801 FAX：03-3238-4414 郵便振替：00140-8-194788

HP：<http://dept.sophia.ac.jp/human/philosophy/>

☆第 90 回上智大学哲学会大会のお知らせ

今夏、下記の要領で第 90 回上智大学哲学会大会を開催いたします。万障お繰り合わせのうえご出席くださいますよう、ここにご案内申し上げます。

日時：2019年6月23日（日）13：00～16：30

会場：上智大学 12 号館 1 階 102 教室

★プログラム

I 研究発表 13：00～15：15

○荻野陽太（本学大学院博士前期課程）

歴史の哲学と歴史性——ハイデガーはヨルクから何を受け取ったか——

○秀島真琴（本学大学院博士後期課程）

コーヘン『理性の宗教』における相関関係について

○中村信隆（本学文学研究科哲学専攻 PD）

人間の尊厳は何を規範的に含意するのか

——尊厳概念の二重性を手掛かりにして——

——休憩——

II 講演 15：30～16：30

○杉尾一（本学哲学科助教）

語り得ぬ物理的實在——自然言語の限界と数学的世界像

III 懇親会 17：00～19：00

会場：上智大学 7 号館 3 階哲学科共用室・哲学研究室

会費：500 円

※今回は、より多くの方に気軽に懇親会に参加していただけるよう、会費を大幅に下げております。どうぞふるってご参加ください。

☆講演要旨

語り得ぬ物理的实在——自然言語の限界と数学的世界像

杉尾一（本学哲学科助教）

20世紀初頭に相対性理論、量子力学が誕生してから、私たちの自然観は大きく変化した。とりわけ、量子力学は、物理的实在に関する信念に対して、とりわけ大きな衝撃を与えたといえる。電子や光子といった量子的対象の波動性・粒子性からなる二重性は、いわゆる重ね合わせの状態からの収縮という観測問題、物理的实在に関する不確定性の問題、さらに、これらに付随する量子力学の解釈問題をもたらした。

このような一連の問題を背景として、量子力学に反対する物理学者も現れた。例えば、アインシュタインは、同僚のポドルスキー、ローゼンらとともに「物理的实在の量子力学的記述は完全と考えられるか？」(1935)という量子力学に対する批判論文を *Physical Review* に投稿した。しかし、この論文で提唱された、今日において量子エンタングルメントという量子状態は、アインシュタインらの意図に反して、むしろ、量子力学の自然記述の確からしさを高めたと言える。実際、ベルの不等式の破れから、アインシュタインらが想定した局所实在論が成り立たない可能性が示唆されている。このような問題に対して、どのような哲学的な解釈を与えるべきなのだろうか。

本発表では、哲学的観点から量子力学の数理的側面について考察しながら、自然言語の限界と数学的記述から生じる諸問題、特に、物理的实在と言語に関する問題を扱いたい。そのために、EPRの議論を紹介した後、 C^* 環を用いた代数的アプローチを用いて、ベルの不等式とその破れについて説明する。その上で、従来の物理量概念の代替案として、作用素としての物理量を物理的対象の属性とみなすのではなく、私たちが物理的対象を捉える際の認識の枠組みとみなす認識論的解釈を与える。上記に並行しながら、物理量概念を含む物理学上の諸概念が、物理理論の発展とともに適切に緩められてきたことを概観する。そして、この「概念を緩める」という操作によって、物理的概念が数学的概念に対応付けられるものの、結果として、数学的概念が、私たちの自然言語の範疇に収まる概念でないことから、私たちが語り得る形での实在概念を量子力学において原理的に構成できないことを明らかにしたい。

☆研究発表要旨

歴史の哲学と歴史性——ハイデガーはヨルクから何を受け取ったか——

荻野陽太（本学大学院博士前期課程）

本発表では、前期ハイデガーにおける「歴史性(Geschichtlichkeit)」を解明するために、ハイデガーとヨルク (Paul Yorck von Wartenburg, 1835-1897) の影響関係を探る。

ハイデガーの「歴史性」は『存在と時間』でも一章が割かれている重要な概念であり、「時間性」を理解するうえでも無視できないものである。また、歴史性には、現存在が自らに固有な実存の可能性に先立って歴史的に規定されているという仕方(非本来的歴史性)と、そうした規定と距離を取り、そこで無自覚に伝承されていたものが明示的に浮き彫りになる仕方(本来的歴史性)があるが、これらがその後の存在論の歴史の解体への通路となる点でも重要である。しかし、重要性が見えにくく、ハイデガー自身の言説が複雑であるため、全容の解明に至っていないように思われる。

ハイデガーが「歴史性」という概念を積極的に使いだすのは1924年の「時間の概念」と呼ばれる未公刊論稿からであり、これは『ディルタイーヨルク往復書簡』(1923)への書評という形を取っている。しかし、ハイデガーとヨルクの影響関係に関して、ディルタイ批判がヨルクを通じて結実したという以上の指摘は研究者によってなされていない。そこで、本発表では『往復書簡』におけるヨルクの「歴史の哲学」という思想が、「時間の概念」における歴史性に影響を及ぼしていたことを示す。

ヨルクによれば、哲学が自己意識の分析(自己省察)である限り、自己意識に内在する歴史的な制約(歴史性)を無視した哲学(体系のみの哲学)は不適切である。これに対し歴史性を踏まえた自己意識を探求する「歴史の哲学」が必要となる。こうした「歴史の哲学」においては、体系と歴史の一致が目指される。以上をヨルクによるランケ批判などの具体例も踏まえて示す(第一節、第二節)。

ハイデガーは「時間の概念」の現存在分析と歴史的な認識の接続点となる箇所、ヨルクの「歴史の哲学」の影響下にある言説をし、自身の哲学における体系的な部分と歴史的な部分を連続させている。それゆえ、ハイデガーの歴史性がまず、ヨルクの影響下において、現存在分析と存在概念の歴史的解体との紐帯として捉えられていたことを示す(第三節)。

*

コーヘン『理性の宗教』における相関関係について

秀島真琴（本学大学院博士後期課程）

ヘルマン・コーヘン（1842-1918）は、ドイツのユダヤ人哲学者であり、新カント学派の代表的な人物である。彼は、その生涯の研究生活に渡ってカントの哲学を継承したうえで、自らの哲学体系をつくり出した後、晩年には宗教の重要性を見出し、自身が信仰していたユダヤ教に立ち返ってこれを研究するに至った。この晩年の彼の哲学が最終的に行き着いた地点こそが、本発表で扱う『ユダヤ教の源泉からの理性の宗教（*Religion der Vernunft aus den Quellen des Judentums*）』（1919）（以下、『理性の宗教』と表記）である。しかし、彼の生きた第一次大戦と第二次大戦という時代の影響もあり、現在に至るまで、国内外を問わずコーヘンの思想を継ぐ者や研究する者の数は少ない傾向にある。特に、国内では、ユダヤ思想や宗教論の面でのコーヘン研究は行われているが、カント解釈を踏まえた上で、彼の哲学思想の全体を視野に入れている研究は、ごく僅かである。大正時代に、彼の前期カント解釈の著作がいくつか翻訳されているが、晩年の宗教論については触れられていない。また、それ以降には、翻訳書や研究書は刊行されていないというのが、コーヘン研究の現状である。

コーヘンは彼の研究生生活の初期から、「相関関係（Korrelation）」という概念に重きを置いており、これは晩年の『理性の宗教』にまで一貫して用いられた言葉である。彼は、『理性の宗教』において神と人との関係を打ち立て、その統一を目的としているが、その神と人との関係性の鍵を握るのは、人と人との関係である。そして、コーヘンはこの神と私、私と他者の関係を、「相関関係」の概念によって表している。『理性の宗教』における相関関係とは、それぞれが完全な個としてある断絶されたもの間に生じる倫理的な関係性のことである。この関係性は、関係するもの同士の間を生じた独自の関係であり、その両者の関係を特別なものとして浮かび上がらせる。コーヘンによると、この関係性は、比類なき神と全くの個としての私、そして全くの個としての私と全くの他者の間に見出される。今回の発表では、この『理性の宗教』における神と人、人と人との相関関係の概念を明らかにすることによって、晩年のコーヘンが行き着いた相関関係概念について明らかにしたい。

*

人間の尊厳は何を規範的に含意するのか ——尊厳概念の二重性の手掛かりにして——

中村信隆（本学文学研究科哲学専攻 PD）

「そのような行為は人間の尊厳に反している」と言う場合、我々は通常、その行為は道徳的に不正であり端的に許されないと理解する。尊厳に反しているかどうかということは、行為の正不正を判断する上で重要な規準と考えられるのである。しかし尊厳の概念は、このような重要な規範的役割を与えられているにもかかわらず、どのような根拠に基づいてどのような結論が導き出されるのかが不明瞭であると批判されてきた。本発表の目的は、尊厳の規範的含意に関するこのような批判に対して、尊厳が明確で独自の規範的含意をもつことを明らかにすることにある。

本発表はまず尊厳の概念を、その伝統的な理解に従い、特定の秩序における高位の階級およびその階級への相応しきないし威厳として規定した上で、尊厳は増やしたり保存したりする対象ではなく、敬意や尊重の対象となるものであることを確認する。その上で、尊厳の規範的含意にまつわる問題を以下の三つに分ける。(1) 一つ目は、尊厳の尊重とは結局のところ自律の尊重といった他のより明確な原理によって置き換えることが可能であり、よって尊厳の概念は余計で冗長なものに過ぎないのではないか、という問題である。(2) 二つ目は、尊厳は一方では人間に内在する不可侵なものであり、獲得されたり失われたりすることはないと理解されるが、他方では、尊厳は自らの振る舞いや他人からの危害によって傷ついたり失われたりすると理解され、その点で矛盾があるため、尊厳からどのような結論が導き出されるのかが不明瞭になる、という問題である。(3) 三つ目は、二つ目の問題と関連するのだが、尊厳は一方ではあらゆる人権の根拠とされるが、他方では、一部の人権の内容として尊厳の保護が要請され、この点で一貫性がないという問題である。

本発表では(1)の問題に対して、尊厳に概念に本質的に備わる「階級」という次元を手掛かりにして、尊厳が他の原理によって置き換えることができない独自の規範的含意をもつことを明らかにする。そして(2)と(3)の問題については、尊厳の概念が、理性的能力に基づく高位の階級という内面的側面と、その階級に相応しい威厳という外面的側面を不可分に合わせもつことおよびその理由を明らかにしたうえで、この尊厳の二面性ないし二重性に基づいて、尊厳概念の規範的含意を明らかにする。

研究発表の募集

上智大学哲学会では、2019年秋の大会（第91回大会、10月27日開催予定）の研究発表者を募集しております。発表を希望する方は、以下の記載事項をまとめたもの5部を郵送（持ち込みも可）にて提出していただきますようお願い致します。なお、本学大学院生は発表応募に際して必ず指導教員と事前に相談するようお願い致します。

1. 所属・名前・メールアドレス
2. 題目
3. 発表要旨（800字～1000字）
4. 上智大学哲学会大会でこれまで発表した回数と時期

郵送先：

上智大学哲学会事務局

〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町7-1 上智大学7号館3階 哲学研究室内

※「研究発表応募書類在中」と朱筆ください。

提出締切：2019年8月31日消印有効

なお、希望人数が多い場合は、上智大学哲学会委員会にて調整いたしますので、ご了承くださいませよう、よろしくお願い申し上げます。

※問い合わせに関しましては、電話・ファックス・電子メールでも結構です。

TEL：03-3238-3806 FAX：03-3238-4414

E-mail：sophia.philosophy.society@gmail.com

『哲学論集』原稿募集

『哲学論集』第49号（2020年10月刊行予定）に掲載する研究論文を下記の要領で募集いたします。

- 応募資格：当年度までの会費をすべて納入済みの正会員であること
- 提出締切：2019年4月末日消印有効
- 執筆要領：A4判用紙1枚を横長に使用し縦書きとし、注を含め16,000字以内。
- 応募要領：原稿5部と、氏名・論文題目・注込みの字数・住所・電話番号・E-mailアドレス・所属を記入した応募論文調書（体裁自由）1部を下記の応募先まで郵送すること（持ち込みも可）。またそれらの電子データを下記の上智大学哲学会 E-mail アドレスまで送付すること。
- 注意事項：論文掲載権は、編集委員会に一任される。
※字数に関する規定が厳密になりましたので、ご注意ください。

【郵送先】

上智大学哲学会事務局

〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町7-1 上智大学7号館3階 哲学研究室内

※問い合わせに関しましては、電話・ファックス・電子メールでも結構です。

TEL：03-3238-3806 FAX：03-3238-4414

E-mail：sophia.philosophy.society@gmail.com